NEXT21自然のたより
2012年9月

No. 9

2012 年 9 月 4 日

1. クマゼミ

８月に入って大阪近郊では朝からクマゼミが大合唱、「シャシャシャシャ…」が響いています。NEXT21 にもクマゼミが多く、８月５日 NeXT21・1F エコロジカルガーデンを中心に、クマゼミをカウントして見ました。

生きたクマゼミ　約 30 匹
クマゼミ抜け殻　40 匹以上

アブラゼミなど、他のセミもいる筈と思っていますが、今の所確認したのは、クマゼミだけです。

2. シロテンハナムグリ

頭の先がＶの字はシロテンハナムグリ、真っ直ぐならばシラホシハナムグリとのこと、表から見えず裏返しにして見ました。

NEXT21・１Ｆ駐車場南側入り口にクヌギの木があり、その１本から樹液が出ており、樹液の好きな昆虫たちの餌場となっています。ほとんどハナムグリで 100 匹以上、最も多いのはシロテンハナムグリです。

里山を歩いているとクヌギ・アベマキ・コナラなどに樹液の出る木があり、カブトムシ・クワガタ、そしてタテハチョウやスズメバチが樹液を吸いに来ている所を良く見るが、NEXT21 に樹液の出るクヌギのあったことにびっくりしました。

樹液がでる原因は、蛾（ボクトウガ）の幼虫が材に住みつき、孔をあけ加工し続けることで樹液を浸出させ、樹液に集まるアブやガなどの昆虫や、ダニを捕食しているためです。

NEXT21 周辺にはハナムグリ以外にも樹液を好む昆虫がいる筈、カブトムシやクワガタなど人気者も来ないかどうかを楽しみに、時々この木を確認したいと思っています。

3. ヤマトシジミ

1. ナミアゲハのイモムシ

（4齢幼虫）

NEXT21 に訪れるチョウはナミアゲハ・アオスジアゲハ・モンシロチョウなどで、7月にはナミアゲハがカラタチに産卵していました。
その時の卵から生まれたのでしょうか、8月に入って幼虫（イモムシ）を確認することができました。

卵から出たナミアゲハ幼虫（1齢）は、その後脱皮を4回繰り返したあと（→2齢幼虫→3齢幼虫→4齢幼虫→5齢幼虫＝終齢幼虫）蛹になり、そしてナミアゲハ＝チョウが誕生します。2齢～4齢幼虫は写真のように黒白の地味な姿をしていますが、外敵の野鳥に食べられないよう、鳥の糞に擬態して（似せて）います。

2. ヤマトシジミ（シジミチョウ科）

ナミアゲハやアオスジアゲハは体が大きく、飛翔力が高いので、飛んでいるのは屋上庭園や樹上の高い所です。一方、エコロジカルガーデンなど1F周辺で低い所を飛んでいるのは中型シロチョウ科のモンシロチョウやシジミチョウ科の仲間です。

エコロジカルガーデンにはヤマトシジミが何匹かいて、地上すれすれ草の上を飛びまわっていましたが、幼虫の食草であるカタバミを探していたのでしょうか。写真はヤマトシジミがカクレミノの小さな花にとまり、蜜を吸っている所ですが、エコロジカルガーデンには、食草があり吸蜜できる花も咲いているので、幼虫・成虫がともに生活できる環境を見つけて棲んでいます。

4. ムラサキシキブ（クマツヅラ科）

1. コムラサキ

平安時代の才媛紫式部の名前が種名になっているムラサキシキブ、名前の通り紫色の実が美しく庭木に良く利用されています。大阪近郊の低山でよく見かけるが、庭木として利用されているのは小ぶりで実が多くついた長い房状の枝を伸ばすコムラサキです。

ムラサキシキブは実の色に対してつけられたと思われるが、花も紫色で愛らしい。ムラサキシキブ（コムラサキも）は通常 6 月～7 月に咲くが、NEXT21 では 8 月下旬まで花が咲き続けていて、先に咲いた枝の青い実と同居しています。

2. 液果は鳥と共進化の途中

７月に書いたように色のついた木の実＝液果は、実を鳥に食べてほしいと木の側が鳥に出しているサインです。

種子が熟しておらず食べられると困る時期は葉と同じ緑色をしているが、熟して種子を移動させたい時期になると色づき、ムラサキシキブは紫色に変化します。

液果は①鳥の口に合った大きさ、②鳥が好む色、③鳥が呑みやすい形、④種子と果肉のバランスなど、鳥に食べ続けられたため、今の形状になりました。ムラサキシキブの実が小さいのはメジロなど小さい小鳥に食べてもらえる大きさになっています。

5. サルスベリ(ミソハギ科)

1. 百日紅とサルスベリ

NEXT21 では、1F～屋上庭園まであちこちにサルスベリの花が咲いています。
サルスベリは中国原産の花、夏の間ずっと咲き続けるので「百日紅」と名付けられていました。

一方、日本に入ってきてついた和名は「サルスベリ」、写真のように幹がつるつるしており「木登り上手な猿さえも滑り落ちるほど、樹皮が滑らかな」ためです。
日本にはもともと「リョウブ」などつるつるした木をサルスベリと呼んでいたようですが、中国産の百日紅はそれ以上につるつるしているので、サルスベリの本家におさまったようです。
「百日紅」と書き「サルスベリ」と読むのは、中国での漢字名と、日本での読み名が合体したためです。

2. 乾果は実の栄養が鳥を呼ぶ

サルスベリの実は、自分で種子が移動できるよう小さな翼(羽)をもっている乾果です。
一昨年の冬(2010 年初冬～2011 年初春)、冬鳥のマヒワが大阪近郊で多数越冬しましたが、マヒワが一番好んだのはサルスベリの実でした。
液果と違ってサルスベリは種子移動に鳥を必要としていないのですが、鳥の方が種子の栄養価に目をつけ、乾果を食べに来ます。
今冬、マヒワが多ければ、NEXT21 のサルスベリにも訪れることが期待されるので、楽しみにしています。